

# 国際ハインリッヒ・シュッツ協会

日本支部事務局ニュース⑬（電子版）

2013年12月15日

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部

設立 1965年3月28日

支部長	正木光江
事務局長	荒川恒子
会計	山下道子

国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部事務局ニュース編集 荒川恒子

## 国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部の歩み (3)

ハインリッヒ・シュッツ

尾崎喜八

静かに齢の坂をくだる丘の上で、シュッツよ、  
或る日私はあなたの音楽に初めてまみえた。  
そしてヨーハン・セバスチヤンの豊かな世界の広がりの上に  
遠くあまたの星座の輝くのを見た。

それ以来あなたの芸術は  
私の仰ぎ見る精神の天界図のなかで、  
いよいよ独自の光を強め、輪郭を明らかにしながら、  
善に通ずる美への遥かな郷愁を奏でている。

あなたの高らかな決然とした抑揚は  
ともすれば凡庸に墮する私の生活を奮い立たせて、  
私を最後の旅路へと充実させる。

そしてあなたの凝縮された宗教的情緒は  
時にゆるやかに解かれ、花のように咲きひろがって、  
私の最後の園を聖なる薫りと色とで満たす。

正木光江さんが国際ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部事務局長に就任されたのは1967年で、その時点でのメンバーは21名でした。その中で現在までメンバーなのは、船橋一郎さん、橋本周子さん、それに正木さんの3名です。1967年には音楽学の勉強をシュッツ研究から始められた高橋浩子さん、翌1968年には、自然と音楽を愛する詩人である尾崎喜八さん、「日本バロック協会」指揮者の金子登さん(金子さんに関しては、歩み(2)です)で言及しましたが、正確には1968年入会とのことですが、日本を代表するソプラノ歌手で、晩年には好んでバロック音楽を歌われた三宅春恵さん、ヴェストファーレン州立教会学校で学び帰国されたばかりのオルガニスト持田昌子さんの4名が入会されました。

さて1974年に亡くなられた、尾崎喜八さんのシュッツに捧げる上掲の頌歌は、1966年(昭和41年)に出版された、同氏の詩集『田舎のモーツァルト』に収録された詩です。淡野弓子さんは、すでに1966年に、率いておられた「レーベンス・コア」の第1回公演のパンフレット、そして1968年9月14日に開催された「ハインリッヒ・シュッツ合唱団・東京」の第1回コンサートを、この詩で飾りました。また正木さんは同詩を、訳をつけてドイツの本部に送られました。本部からの自筆原稿の求めに応じた尾崎さんは、「ペンと筆のどちらですか」と電報(!)で、正木事務局長に問い合わせられ、正木さんはその両方をお願いされたそうです。そして筆でかかれた第一節が、1969年の『アクタ・サギタリアーナ』の表紙を飾りました。

さてその頃のドイツおよび日本におけるシュッツ受容に関しては、『礼拝と音楽』No. 11号(1976年)第48ページで、正木支部長が1964年にレムゴーで開催されたシュッツ・フェストに参加したいきさつを、語っておられる記事から、その一端を知ることができます。当時ケルン大学の音楽学研究所で、音楽史の勉強をされていた正木さんは、「学会誌にはさみ込まれたシュッツ祭のチラシを何気なく手にして、六日間連続連夜、ジョヴァンニ・ガブリエリからシュッツを経てヘンデル、バッハにわたって組まれた講演とコンサートの興味深いプログラムに魅かれて出かけてみることにした」、「シュッツは私にはまだ未知の部分の多い作曲家であったが、日本を発つ前に、芸大の服部先生のゼミナールで、シュッツの高弟ベルンハルトの「作曲法教程」を読み、それに照らして「クリスマス・オラトリオ」を分析するという御指導をいただいております、また、それまで私が強い関心を持って聴いたり調べたりしていた、大バッハやモンテヴェルディとつながりの深い作曲家なので、興味深く思われたのである」と述べておられます。

1966年暮に3年に渡るドイツ留学から帰国された正木さんは、カール・フェッテル博士との約束を守り、本

協会の事務局を預かってくださいます。しかし正木さんの帰国を待ち望んでいたのは、シュッツ協会ばかりではありませんでした。おりしも1966年に、日本の音楽学界が総力を挙げて、励むべき事業が始まったのです。すなわち「南葵音楽文庫」再興に向けての準備でした。この文庫の設立は専門的に音楽を学び、ロンドンに留学した紀州の徳川頼貞侯が、1917年(大正6年)に当地で「カミングス・コレクション」と称されるコレクションを、アメリカ議会図書館と折半で落札したことに端を発します。バロック音楽の楽譜を多く含む同コレクションは、関東大震災、第二次世界大戦等の災害に合い、疎開、海外搬出、一部流出等を経て、大木九兵衛氏個人の所有に移り、未公開のままで眠っていました。ところが1966年にドイツのバッハ研究所が、バッハのコラールの自筆譜の所在調査にあたり、同コレクションにたどり着いたのです。その時調査に協力した読売新聞と大木氏は、それをきっかけに、徳川氏所蔵時代に「南葵音楽文庫」と名付けられていた文庫の再興事業に乗り出し、1967年3月に東京と大阪で「南葵音楽文庫特別公開展」を開催しました。また同年4月に、開館したばかりの東京・駒場の日本近代文学館に間借りした部屋で、3年がかりで所蔵資料の再調査と整理を行いました。この大きな仕事の責任者となったのが正木支部長なのです。その際東京藝術大学修士課程に所属し、バロック音楽に興味を持っていた学生も、カタログ作成の助力に駆り出されました。筆者も留学前に、ほんのわずかにお手伝いをし、カタログ作成とか整理整頓といった正確さを求められる仕事には、自分は全く不向きであることを、痛感したことを思い出します。なおこのコレクションの整理が、いかに世界の音楽界に貢献できる仕事であるかは、正木支部長がIAML(国際音楽資料情報協会)のニューズレター第4号(1996、4月30日)に、「大木コレクション・南葵文庫：現在の状況および中断されているRILM A IIシリーズへの協力作業について」と題して詳細に記述しておられます。

あの時代には音楽大学の楽理科で学ぶ学生の多くが、バロック時代の音楽を学士、修士論文の論題に選んだことも思い出されます。本協会のメンバーとは限りませんが、ヘンデル研究家の故・渡部恵一郎氏、藤江効子氏、バッハ研究家の角倉一朗氏、東川清一氏、1600年前後の音楽を研究しておられた正木支部長、ルネサンス音楽研究家の高野紀子氏等が、故・服部(前)支部長の指導を受け、活動を始めておられました。また私が東京藝術大学に入学した1961年(昭和36年)には、音楽史授業の実践として、渡部恵一郎先生の御指導で、ルネサンスやバロックの音楽を合唱する時間があり、さらに多田逸郎先生によるリコーダー実習の授業が新たに開講されたのです。このような実践を含む音楽史のカリキュラム構築は、ドイツの音楽界、音楽研究のあり方を、身をもって知られた故・服部幸三(前)支部長の、御尽力の賜物であったはずです。そして東京藝術大学楽理科の15名しかいない私と同学年生の内、3名がバロック音楽に関わる学士論文をもって、学部を卒業しました。ルネサンスやバロックの音楽は、まだまだ未知の世界で、それを音響と共に体験できる機会はわずかでした。コンサート情報、楽譜の入荷等は競いあうように伝えあったものです。まただれかが入手した楽譜は、互いに貸し借りしあい、大切に写譜をして保管したものです。1660年代とは、尾崎氏の詩に象徴されるように、多くの日本人にとって、未知であったバロック音楽の世界へ、扉が開かれた時代だったのです。(続く) (事務局長 荒川恒子)

## ハインリッヒ・シュッツ協会日本支部の新年懇親会へのお誘い

日本支部長 正木光江

皆様にはお忙しく新しい年を迎える御準備をなさっておられることでしょう。

さて新年の行事も一段落といった頃に、皆様と楽しい語り合いの時を持ち、2014年に50年目に入る日本支部の過去・現在・未来に関して等、様々な御意見や御希望をいただければ幸いです。お知り合いや御友人等もお誘い合わせくださり、ドイツ料理で昼食を御一緒にできれば幸いです。東京の真ん中にある、ごく家庭的な小さなレストランに御協力いただき、御都合のつきやすいと思われる日時を選んでみました。

日時：2014年1月13日(月・祝) 12:00 - 15:00

場所：ドイツ料理 カイテル (Keitel)

160-0022 新宿区新宿 5丁目6-4 衆町ダイヤモンドマンション 1F

Tel 03-3354-5057

(最寄の駅 地下鉄副都心線 新宿三丁目より徒歩5分、なおJR 新宿駅から歩けます)

<http://www.keitel.jp/> 地図も掲載されていますが、御入用の方はお申し込みの時に御言葉をお添えくださいませ。

費用：料理と飲み物で5,000円程度(料理はカイテルさんに適当にコースを組んでいただきます)

当日徴収とさせていただきます。

参加のお申し込み: 遅くも 2014 年 1 月 7 日 (火) までに事務局まで

あるいは電話・Fax 045-421-0502 でお申し込みくださいませ。

なおそれ以後のお申し込み、あるいは直前のキャンセルはお控えいただきたく、お願いをいたします。お返事をいただけない場合は、欠席とみなさせていただきます。

久し振りにお目にかかるのを、楽しみにいたしております。

## アルプスを越えて、光溢れる国へ

ハインリヒ・シュッツ・フェスト、ヴェネツィアに参加して

19.-22. 9. 2013

事務局長 荒川恒子

ハインリヒ・シュッツ(1585-1672)は2度イタリア留学をはたしましたが、今回は1609年から1613年まで、すなわち24歳の彼が、カッセル方伯モーリッツの支援のもと、聖マルコ大聖堂のオルガニスト G. ガブリエーリ(1557-1612)に師事すべく、初めてアルプスを越えた時代に焦点をあてたフェストでした。中部ドイツからアルプスの彼方、海を渡ってヴェネツィアに到着したシュッツは、どのような印象を得たのでしょうか。その感じを共有したいと考え、まず秋が深まるドイツを訪ね、うっすらと雪化粧をしたアルプス上を飛び、ヴェネツィア空港から船で街を目指しました。船の上から見た街は、まさにてんこ盛りのどんぶりのように、建物が地面からこぼれ落ちそうに見えました。なおヴェネツィアは季節によりホテルの値段が、軽く3-4倍上下しますし、参加者を一緒に宿泊させるに適切な場を見つけるのは困難と考えられたのでしょうか。各自で宿泊する場所を予約するやり方が取られました。私は聖マルコ地区で、大聖堂とリアルト橋の間、まさに観光客で溢れる中央地区にあるのですが、ちょっと裏に廻った静かな所にホテルを取りました。到着した18日は多少曇りぎみな天候でしたが、翌日から滞在中はいつも南国の太陽の明るさに眩暈を覚え、気持ちは高揚しました。

19日の開会式とコンサートはサン・ポーロ地区にあるスクオーラ・グランデ・ディ・サン・ロッコ(聖ロッコ大信者会)とその教会で行われました。これは観光というより、庶民の日常を垣間見ることのできる、多少落ち着いた地域にあります。登録したメンバーだけで、ゆうに150名を超え、しかも同姓の方が多いということから、家族連れ合って来られたことがわかります。現在でもヴェネツィア行きへの期待、夢は大きいことが窺えます。事実、この街は期待を裏切りませんでした。さてメンバー達の会話はまず無事にホテルに行き着けたか、ということに盛り上がりました。ヴェネツィアは地区に分かれ、地区ごとに通し番号がついています。そこで住所番号はあつという間に1000番を超えてしまいます。ホテルから可愛い地図が送られてきた時には、そのサービスのよさにびっくりしましたが、地図なしで目的地にたどり着くのは難しいのです。街のガイドさんの話によると、郵便局員はまず住所のありかを憶えることから職務を始めるとのこと。しかしフェストが終わる頃には、身体を斜めにして通り抜けるような小道を歩き来し、船で対岸に渡る術も身につけ、散策を楽しめるようになりました。ドイツ研究所ヴェネツィアはカナル・グランデ(大運河)に面しているのですが、カナル側の入り口は用いられないため、迷路のような狭い路地を通り抜けてたどり着きます。なにもかも面白い体験でした。

さて開会式の会場に、何故サン・ロッコが選ばれたのでしょうか。フランスはモンペリエの名家の生まれである聖人ロッコ(1295-1327)は、自らの富を他人に分け与え、貧しい人のために生きることに生涯を捧げ、ペストに対する守護聖人と称えられました。そこでたびたびペストの猛威に苦しめられたヴェネツィア人は、1478年に彼を信仰する信心会を設立しました。1485年に彼の肉体が故郷モンペリエからヴェネツィアに移されると、1489年から1508年にかけて、このスクオーラが建設されたのです。内部に入るとヴェネツィア派の巨匠ティントレット(1518-1594)が、円熟期である46歳から69歳にかけて、聖書に題材を取って描いた天井画が、私達の目も心も奪い、ヴェネツィアの咲き誇る文化と往年の富の力をいやがおうもなく、強く印象づけました。なお翌20日には、細かくこれらの絵画や、二階に上る階段のありように関して説明を受けることができました。博士論文執筆のため研究所に滞在している少壮の学者から、階段や絵は単に芸術として鑑賞するに留まらず、むしろ表現したかった内容が、それらの配置の仕方や題材を通して、視覚的に強調されることを教えられました。夜には、コンサートに合わせるようにオルガン・バルコニーの改築なった聖ロッコ教会で、師ガブリエーリと弟子シュッツのマドリガーレ、さらにマックス・ベックシェーファー(1952-)がヴェネツィアで修学した記念に、2009年に作曲したマドリガーレが演奏されました。シュッツのマドリガーレ集第1巻(1611)は、まさに彼のヴェネツィア留学の成果を示すものであり、ベックシェーファーは、その曲集を座右に置きヴェネツィアで勉学に励んだそうです。

なおこの教会はガブリエーリが聖マルコ大聖堂と兼務でオルガニストとして働き、ここのためにも多くの作品を残した縁ある所だそうです。

19日の開会式の時には、ワイマールの音楽大学の音楽学教授ヘレン・ガイヤーGeyer 女史による「文化交流の道筋—ハインリヒ・シュッツとヴェネツィア楽派」、そして20日は研究所において、まずパドゥアのアントニオ・ロヴァート Lovato 教授が、シュッツのラテン語による作品の歌詞の原典に関して、「O bone, o dulcis, o benigne Iesu」という、類似の言い回しが多く存在する言葉を例として、原典の特定がいかに困難であるかに言及されました。ロンドンで学んだダーヴィド・ブライアント Bryant 教授は、現在ではヴェネツィアの Fondazione Giorgio Cini 音楽史ドキュメンテーション・センター長として、記録文書を通してヴェネツィアの文化研究をなさっております。地味な原典研究を通して、従来のヴェネツィアに関する諸説を、再調査、検討する必要を強く感じるとコメントされました。ドイツ生まれながら、ロンドンのキングス・カレッジで、シュッツのレトリック再考と題して博士論文を執筆し、同地で教鞭を取るベッティーナ・ファルヴィッヒ Varwig 女史による「シュッツ時代のイタリア像」、ハイデルベルクのジルケ・レオポルト Leopold 教授の、「シュッツがヴェネツィアで学ばなかった事」といづれも興味深い発表が続きました。しかしガブリエーリ、シュッツ時代さながらの空間における素晴らしいコンサートを前にしては、細かい発表は陰が薄れてしまうのは、いたし方ないことでしょう。この日の夜は待ちに待った聖マルコ大聖堂でのコンサートです。翌21日が聖マタイの祝日であることを記念して、G. ガブリエーリの多合唱による作品と、マタイの祝日にちなんだ歌詞によるシュッツの作品 (Psalmen Davids, 1619 より) が、プレーメンのマンフレッド・コルデス教授率いる音楽大学学生により演奏されました。バロック時代の幕を開ける重要な音楽書法である多合唱の誕生は、まさにこの教会の構造を生かすことから生じたと言え、音楽史の時間に教わり、また私も教えたものでした。それを今体験できる！！ほとんど全ての参加者が待ち望んだコンサートであったはずで、現在両バルコニーに設置されているオルガンは、17世紀の音楽演奏に不相当ということで、1700年頃にナポリで製作され、普段は後陣に置かれている楽器を使用、さらには歴史的には忠実ではありませんが、数曲は現代人の聴覚や感覚に合わせて、歌手が両バルコニーからではなく、祭壇上から演奏しました。それを実現させるには、同聖堂の聖職者の御協力があつたとのこと。同聖堂の使用許可を得るにも、多大の努力と難問があつたはずで、ヴェネツィアの研究所の皆さんの御苦労を感じます。

さてはて21日は素晴らしいガイド付きで、聖マルコ広場と聖堂の見物、「ヴェネツィアとドイツ人との関わり」と題する街歩きがありました。ドイツ語に堪能なガイドさんは、どなたも楽しくも面白い説明を、多くの譬えを交えて語られます。ドイツ語にイタリア人のメンタリティーが重なり合い、嘘かまことか判然としない内容なのですが、両民族の違いが明瞭に浮き彫りにされました。昼の総会を挟んで、夕方からはマティアス・シュナイダー氏によるオルガン・コンサートがありました。Chiesa di S. Cassiano (聖カッシアーノ教会) に設置されたピエトロ・ナッキーニ Nacchini (1694-1769) 製作 (1743年) の楽器が用いられました。彼はフランシスコ会の修道士でしたが、オルガン製作に興味を持ち、ヴェネツィア周辺で約350台のオルガンを残したといわれます。なお最初はイタリアの巨匠に学びましたが、後にはアルプスを越えて来るドイツのオルガン製作者からも影響を受けたとのこと。G. フレスコバルディ、D. ブクステフーデ、C. メールロ、P. ジーフェルト、J.S. バッハによるヴィヴァルディのコンチェルト・グロッツ編曲で締めくくる、心憎いアイディアに満ちたプログラムでした。前もって使用オルガン等を読んでいなかったのですが、今まで私が聴いたことのあるイタリアのオルガンとは、少し異なる印象を持ちました。ここにもイタリアとアルプス北の人々との文化交流があることを実感した次第です。

さてお別れの日です。最後の礼拝は、ヴェネツィア最古のプロテスタント教会 Campo Ss. Apostoli で、見事な音響付きで守られました。なおこの教会はヴェネツィアにおいて、ルター派教徒が公に礼拝を守る唯一の場所として設立され、今年200年祭を祝ったそうです。プレーメンのコルデス教授と学生がG. ガブリエーリとH. シュッツの作品を挟み、牧師および会衆は、イタリア語とドイツ語で交互に賛美を歌い、祈りを捧げました。続いてワインとスナックでお別れの挨拶をしあい、各自は名残おしく、しかし折角の機会にとさらに予定した旅行地へと去っていきました。

まだまだお伝えしたいことは沢山あります。政治や経済上の難しさは、いつの時代にも、またこの地にもあります。しかしメンバーに困難さをほとんど知らせることなく、ヴェネツィアの研究所とカッセルの本部は、この素晴らしいフェストの準備を、見事にこなされました。こんなに細やかな心遣いがあるのか、イタリアとドイツの双方に心配りをなさる礼儀の美しさ、両国語を見事に操り調和ある解決を見出し、落ち着いて全てを運営されたドイツ研究所長、ザビーネ・マイネ女史の手腕なくして、このフェストは成り立たなかつたはずで、まさにヴェネツィアを愛し、沈没しかねない小島の上で危ういバランスを取りながら、生活してきた人々の知恵から、女史が学ばれた処世術の故かかもしれません。事実女史はお誘いの文面において、「かばんの中に「エラスティチタ

elasticità」と「セレニタ serenità」という、ドイツ語にはなり難い調合薬をお持ちください。そうすればこの街から、きっと素晴らしい体験をおみやげに、帰国なされることでしょう」と述べておられます。本当にありがとうございました。

追：総会場で、各支部の活動報告がなされます。この頃はフランス、日本、オランダ、北アメリカ、そしてたまにスウェーデンから報告がなされます。私は正木支部長の代理として、本年度の日本での出来事をお知らせしました。その中に3月22日に東京カテドラル聖マリア大聖堂における、ムシカ・ポエティカ《受難楽の夕べ》の演奏会があります。その際シュッツ合唱団・東京がシュッツのモテットに並べて、ルドルフ・マウエルスベルガーの《ルカ受難曲》を取り上げた旨、単なる事実としてお話ししました。すると総会終了後、フェストで何度もお目にかかったことのある老紳士が、つかつかと近寄ってこられ、改めて自己紹介をなさいました。今はベルリン近郊に住み、フード・コンサルタントの仕事をしているその方は、少年であった遠い日に、聖十字架教会少年合唱団員として、その曲の初演に参加されたとのこと。日本の方々の解釈を知りたいが、音源があったら拝聴したいとお申し出。私は逆に初演の時の様子をお尋ねしました。それは1947年、終戦直後で何もなかった時代。厳しい訓練の末、ようやく合唱団員となり、寄宿生活をしたこと、何も無く、楽譜を手で書き、一音一音学んでいたけれど、とても幸せな日々であったとのこと。帰国後さっそく淡野弓子さんにお問い合わせをした所、またまた淡野さんがびっくり。あの曲との因縁を「ムシカ・ポエティカ」秋の御挨拶内で、教えてくださいました。1945年2月13日の空襲により、団員の数名は命を落とし、楽譜もなにも焼失してしまった合唱団のために、当時カントルであったマウエルスベルガーが、1947年1月にたった12日間で作曲した曲とのことです。福音史家もイエスも小アンサンブルで、場面ごとにコーラルが配置されているのです。さて1985年、シュッツ生誕400年という記念すべき年に、シュッツ合唱団・東京は招聘されて3週間に渡る大演奏旅行にでかけました。その旅行に関しては、本ニュースNo.9、No.10の「40年の軌跡」に詳細な記載があります。その時合唱団は、再建されたドレスデンのゼンパー・オペラでシュッツと柴田南雄の作品を歌いました。それを聴かれたドレスデンのM.ヒーマン氏からプレゼントされた楽譜の中に、マウエルスベルガーのこの受難曲が含まれていたのです。なおシュッツ合唱団が実際にこの曲を演奏したのは1994年3月のこと。ドイツのゾーエストで開催されたシュッツ祭に参加した時のことです。そしてドレスデンの聖十字架教会でも歌う機会を与えられ、初演から47年経って、再びこの曲はドレスデンで響いたのです。また今年は、残りわずかになった人生を懸命に生きている、かつての聖十字架少年合唱団員クリストフ少年に、66年振りにこの響きは届けられるのです。いつも日本支部の報告を楽しみにしています、地理的には遠い地で、このような作品が受け入れられていることに驚くと共に、敬意を表し、喜びに感じています、とおっしゃっておられます。

### シュッツ・フェスト 2013 ヴェネツィア大会に参加して

会員 米沢 陽子

思えば2年前のハノーファー大会に参加した折に「2013年の大会はヴェネツィアで開催」とのインフォメーションがあり、ぜひとも参加したいと思っておりました。今年に入り、そのプログラムを拝見し「サン・マルコ大聖堂でガブリエリとシュッツの作品を聴くことができる！この機会を逃してなるものか」と、この旅を実現させました。

私と連れ合いは9月14日に日本を立ち、ミラノとフィレンツェに3日ずつ滞在したのち、ヴェネツィアに入り、2年ぶりにプレーリヒさんとも再会しました。

5日間にわたる盛りだくさんのプログラムのすべてを記すことはできませんので、特に私が印象に残ったことをいくつか挙げてみたいと思います。

今回のプログラムには、シンポジウムやコンサートの合間に市内観光も組み込まれていました。現地ガイドの案内(ドイツ語)で、市内の名所を歩いて回りました。その中でも、私にとって印象深かったのは、サンタ・マリア・グロリオザ・ディ・フラール教会に安置されたモンテヴェルディのお墓です。CLAUDIO MONTEVERDIとはつきり彫られていた墓碑、そして手向けられた白いバラの花。《ポッペアの戴冠》や《オルフェオ》など数々の素晴らしい作品を生み出したモンテヴェルディが目の前に眠っている…。今回の旅は、ジョヴァンニ・ガブリエリとシュッツの音楽を聴きに来たのではありましたが、ヴェネツィアの地でこの大作曲家に会えたことには、やはり感慨深いものがありました。

さて、今回のシュッツ・フェストのハイライト。それはやはりサン・マルコ大聖堂におけるコンサートです。マンフレッド・コルデス氏率いるプレーメンの音楽家たちによる演奏で、ジョヴァンニ・ガブリエリとシュッツの8-16声の作品を聴くことができました。声楽陣は祭壇中央にて、また器楽奏者たちは、祭壇脇の2階両サイド

に分かれて演奏しました。シュッツ・フェスト参加者たちは、通常の観光客が入ることはできない内陣近くの特等席で聴くこととなりましたが「どこの座席が、音響的に良いのだろうか？」ということが気になるのは当然のこと。しかし、実際のところ、わからないものです。最終的には、現役時代に、西ドイツ放送協会でCD制作の仕事をしていたため、演奏現場を熟知しておられるドイツのバーバラさんの隣あたりに陣取ったと記憶しています。

演奏は素晴らしく、目を閉じれば、若き日のシュッツとガブリエリの姿が浮かんできます。これを聴くために、はるばるヴェネツィアまでやってきたのです。大聖堂の丸天井の構造から、私は勝手に、もっとダイナミックな音空間を想像していたのですが、それよりはずっとおとなしい印象を受けました。それでも、歌声が、また器楽の調べが大きな聖堂の隅々に響きわたり、消えていくことに耳を澄ましているうちに400年前の世界と現在とが確かにつながっているのだ…ということを強く感じました。なんと幸せなひとときでしたでしょう！

ご一緒したお二人の音楽学者、荒川恒子先生と佐藤望氏は「毎年必ず西洋音楽史の授業で、ヴェネツィアのサン・マルコ寺院では、ガブリエリたちが活躍していてね…と話すけれども、実際に体験したことはなかったわけで。こうして実際に聴ける日が来ようとは…」と話されていましたが、まさにその通り。そして、このようなチャンスは二度とないかもしれない…。この素晴らしいコンサートの後には、やはり感動を分かち合いたいということで、日本人4人、ヴェネツィア料理店(神楽坂のレストランのオーナーの弟さんが経営している店)に繰り出し、美味しいシーフードとワインを堪能し、おおいに語り合いました。音楽、料理、ワイン、語り、これぞ人生の楽しみ。それを満喫した宵でした。

今回はオルガンのコンサートもありました。サン・カッサーノ教会のピエトロ・ナッキーニ製作(1743年)の楽器で、演奏はマティアス・シュナイダー氏でした。プログラムはフレスコバルディ、メールロ、ブクステフデ、ジーフェルト、バッハの作品。ヴィヴァルディ原曲のオルガン協奏曲ニ短調(BWV 596)では、「何やら弾きにくそうだな…」という印象を受けたのですが、終演後に2階バルコニーで楽器を見て、驚愕。「この楽器である作品を弾いたのか！」と。足鍵盤はいわゆるイタリア様式で(写真でお見せできないのが残念ですが、足鍵盤の形は普通の形とは異なり、シャープ・キーは小さく正方形をし、おまけに鍵盤数は全ての音に対応せず、いわゆるショート・オクターヴなのです)、オルガニストの私としては「こりゃ、弾くのは大変だったでしょう」というものでした。とはいえ、イタリア・オルガンの明るい音色を楽しむことができたコンサートでした。

シュッツ・フェスト最終日、ルター派教会で行なわれた主日礼拝についても記しておきたいと思います。コルデス氏とブレーメンの音楽家たちが再び登場し、前奏、間奏、後奏にシュッツとガブリエリを演奏。なんと贅沢な礼拝だったことでしょう。参列者にはドイツ人もいればイタリア人もいます。それゆえコラール斉唱も、ドイツ語とイタリア語で交互に歌われました。最後に歌われたコラール“Grosser Gott, wir loben dich”は、カトリック教会でもよく歌われる《われ神をほめ》で、嬉しくもなりました。考えてみればシュッツはルター派、師のガブリエリはカトリック。あの時代に教派の違いを超えた師弟関係があった…。こうして同じ礼拝の中で演奏されることに何の違和感もない。うまく言葉にできないのですが、異なる文化を持った人々が一堂に介して祈りを捧げる。そのことにとっても感銘を受けたひとときでもありました。なおブレーメンのコルデスさんに与えられたサン・マルコ大聖堂でのコンサートの準備時間は1時間、シュナイダーさんも役員会に出席後、急いでオルガンの様子を試しに行かれました。経験豊富な方々とはいえ、音楽家としての底力をまざまざと見せ付けられました。

礼拝後、船で対岸のサン・ジョルジョ・マッジョーレ島に渡り、教会の鐘楼から市内、そしてアドリア海を一望。その美しい景色を私は一生忘れないでしょう。サン・マルコ大聖堂で聴いたシュッツとガブリエリの響きとともに…。

## ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京40年の軌跡(10)

会員 淡野弓子

先回は1992年3月18日(水)に開催されたコンサートの報告で終わりましたが、1992年はディストラーが亡くなって50年目という年でした。そこで今回はフーゴー・ディストラー(1908-1942)にまつわる話から始めたいと思います。

1964年秋、留学したドイツ・ヴェストファーレン州立教会音楽院(現・ヘルフォルト教会音楽大学)の応接間の壁に掛かっていた肖像画が見覚えのない人だったので同級生に訊ねると、「Hugo Distler」との答え、この時私は初めて彼の名を知ったのです。日本人にとっては馴染みの薄いこの作曲家ですが、ドイツの教会音楽界で知らぬ人はいない存在でした。学校ではほとんど毎日彼の宗教作品を歌っていたように思います。

ディストラーは1908年6月24日、父は工場主、母は女工の婚外子としてニュルンベルクに生まれました。そ

の後母親が新しい夫とともにアメリカに渡ったため、祖父母の許で育てられ、1927年実科ギムナジウムを修了、ライプツィヒ音楽院へ進み、作曲をグラープナー、オルガンをラミンに師事しました。

1931年1月1日よりディストラーはリュベックの聖ヤコビ教会のオルガニストに就任、そこに置かれていた15世紀の小オルガンに内的興奮を覚え、また歴史的オルガンに戻ろうといういわゆる「オルガン運動」を推進していた人々からも様々な示唆を受けました。

聖ヤコビ教会の「夕べの音楽」で、毎年演奏されていたシュッツの《マタイ受難曲》に心を動かされた彼は、独自の構想によって《コラール受難曲》を書きます。1932年、ディストラーは24歳でした。シュッツに畏敬の念を抱いていた彼は、《コラール受難曲》ばかりでなく、シュッツの《宗教的合唱曲集 Geistliche Chormusik》(1648)に倣って同じタイトルのモテット集を出版し、さらに《12の宗教歌 Zwölf geistliche Gesänge》(1657)に収められた「ドイツ語ミサ」に触発され、《ドイツ語コラールミサ曲 Deutsche Choralmesse》(Op. 3)を作曲しています。

しかし、なんといってもディストラーの最高傑作は、メーリケの詩およそ40篇に作曲された《メーリケ合唱歌曲集 Mörike Chorliederbuch》(Op. 19)でしょう。混声24曲、男声12曲、女声12曲のア・カペラ作品は1939年6月26、27日、「ドイツ合唱音楽祭」で作曲者自らの指揮により混声7曲、男声4曲、女声4曲が初演され、空前の成功をおさめます。この後彼はベルリン音楽大学に教授として招聘され、さらにベルリンのドーム・コーア(ベルリン大聖堂聖歌隊)をも指揮するようになり、外側から見れば順風満帆の人生でした。

シュッツは30年戦争のさなかを必死でくぐりぬけた人でしたが、ディストラーの生活は第三帝国のなかにありました。1942年秋、彼は前任者の死を悼むため、シュッツの《音楽による葬送 Musikalische Exequien》の練習をベルリンのドーム・コーアと始めていましたが11月1日、ガス自殺を遂げます。原因はナチスからの圧迫、徴兵の不安、過労、神経衰弱が大方の見解ですが、このように誰もが想像するような理由ではなかったのではないのでしょうか。深く永く沈潜し、死によってのみ解き放たれる負のエネルギーといったものがあるのではないのでしょうか。

ディストラーはメーリケの詩に潜む魔神的なパワーを驚くほど正確に音としています。例えばメーリケの許嫁で精神を病んだ娘の歌う《アグネス》に漂う鬼気、《炎の騎手》のユニゾンにはドイツを崩壊に追い込んだヒットラーの狂気が重なります。これらのエネルギーと共振する堪え難い日々、ディストラーは天から与えられた才能をコントロール仕損なったのではと思えてなりません。

私がディストラーの音楽を大切に思う理由の最大のものは、彼が当初からシュッツを敬愛し、死の直前まで彼の音楽とともにあったという事実です。このような作曲家はドイツでも珍しい存在と言わねばなりません。ディストラーの音楽には根幹にシュッツがあり、その上にディストラー独自の和声が行進し、またその上にシュッツならではの霊性の輝きといったものが漂うという何層にも積みかさなった鉱石のような趣きがあります。しかし私たちがこの硬質の響きを実際の音とするには、さらに何年もの修練が必要でした。

イースター・クワイヤは4月20日(月)19:00 石橋メモリアルホールにおいて、ヘンデルの《メサイヤ》を歌いました。

Sop : 故・朝倉蒼生 Alt : 辻 宥子 Tenor : 佐々木正利 Br : 故・宮原昭吾

新ヴィジュアルディ合奏団と管打楽器・鍵盤奏者

Vn I : 内田輝(コンサートマスター)、宮内道子、徳井えま

Vn II : 吉井雅子、宮川正雪、橋本洋

Va : 竹内晴夫、渡部安見子 Bc : 三宅進 Kb : 大西雄二

Ob I : 川村正明 ObII : 庄司知史 Fg : 堂阪清高

Trp I : 織田準一 Trp II : 野崎明宏、三澤慶

Timp : 近藤健一(現・高頭) Org : 武久源造

合唱 : イースター・クワイヤ 指揮 : 淡野弓子

《メサイヤ》で驚かされるのはなんといってもジェネズスの書いた台本です。旧約聖書の預言書、詩編、哀歌、新約聖書のマタイ、ルカ、ヨハネ、パウロ書簡、黙示録からこれぞという言葉が選ばれ、縦横に配置され、様々な次元、色々な角度からキリストという核心に迫ろうという試みです。

ヘンデルの音楽はこの言葉を実に分かり易く音楽に移し、その意味を良く伝えていきます。翻って同じテキストをシュッツが作曲するとどうなるか、ということにも興味が広がり、言葉と音楽の関係を考察するということの面白さは増す一方でした。

5月16日(土) 14:00 東大教養学部 900 番教室において東京大学教養学部オルガン演奏会(第60回)が開催されました。

ディストラー《オルガン・パルティータ いざ来ませ、異邦人の救い主》(Op. 8-1) 演奏：オルガン独奏  
ディストラー《メーリケ・コーアリーダーブーフ》(Op. 19)より 序詞/ 夜明け前のひととき/ それぞれの取り分  
/ 捨てられた娘 / 旅の歌/ 鼓手/ 庭師/ 狩人の歌 / 想う魂よ 演奏：ア・カペラ合唱  
シュッツ《ダビデの詩編曲集 1619》(1619)「わが魂よ、主を誉めたたえよ」(詩編第103編によるコンツェルト)  
演奏：合唱とオルガン

オルガン：武久源造 合唱：ハインリヒ・シュッツ合唱団 指揮：淡野弓子

プログラムはディストラーのオルガン作品と《メーリケ・コーアリーダーブーフ》から9曲、最後にシュッツの詩編103編という、ディストラー歿後50年を記念して選曲されたものであることが分かります。主催された教養学部の先生方は、ディストラーに強い関心を示され、メーリケの詩の対訳を作って下さいました。

5月28日にはヴァリオ・ホールにおいて「武久源造チェンバロ・リサイタル」が開催され、ベーム、バッハ、L. クープラン、F. クープラン、ソレル、D. スカルラッティの作品が演奏されました。これは武久さんの第1回目のチェンバロのコンサートでした。

シュッツ全作品連続演奏も第7回目を迎え、6月11日(木)19:00より、武蔵野市民文化会館小ホールにおいて、シュッツの処女作《イタリア風マドリガーレ Italienische Madrigale》(1611、ヴェネツィア)(Op. 1)全19曲を歌いました。

ハインリヒ・シュッツ合唱団、ムシカ・ポエティカ声楽アンサンブル  
リコーダー：守安功 指揮：淡野弓子

シュッツが作曲を学ぶためにヴェネツィアのジョ・ヴァンニ・ガブリエリを訪ねたのは1609年、彼は24歳でした。この《イタリア風マドリガーレ》が印刷に付されたのは1611年です。当時作曲を学ぶものはみな、マドリガルを作品集として残さねばならなかったもので、シュッツのこの曲集もガブリエリ教室の卒業作品というわけでした。

マドリガルのテキストは、極限的な言葉の遊戯を楽しんだマニエリスムの詩です。ここには隠喩や暗号がぎっしりと詰まっていて、この詩を解説しながら音に移し替えてゆくという技法が要求されるわけです。今の常識という「歌」とは違い、言葉そのものを音楽そのものに置き換える技なのです。

言葉は意味を伝えるという役目以上に、各母音の持つ原初的な力、エネルギー、また万人が一つの意味を感じ取ることの出来る子音の波動といった面が重視されます。聴き手は意味を知る前に言葉の現す内容をともに生きることとなるのです。グアリーニ、マリーノといった、いわば言葉の綺想、迷宮にシュッツが敢然と挑んだ姿を眼のあたりにし、言葉と音楽の関係はまことに異なるもの、只ならぬものとの思いを強くしました。

当日はア・カペラのマドリガルを数曲歌っては守安さんのリコーダーソロでひと息、という構成で、なんとかこの不思議な言葉と音の森をくぐり抜けたのでした。難解な曲を19曲も1度にお聴き下さった皆様には、今も尊敬と感謝の気持ちで一杯です。

8月30日(日) 19:00 日本キリスト教団本郷教会 〈讚美と祈りの夕べ〉

主催 本郷教会 構成 ムシカ・ポエティカ

合唱：ハインリヒ・シュッツ合唱団 指揮：淡野弓子

ポジティーフ・オルガン/ チェンバロ：武久源造

クーナウ《聖書ソナタ》ほかとの記録を見つけました。本郷教会の新会堂(現在の建物)が出来て1年目ことです。本郷教会の〈讚美と祈りの夕べ〉は、このおよそ6年後の1998年4月18日、「Soli Deo Gloria ただ神にのみ栄光」と正式に名付けられ、第1回目の演奏会が開催されました。その後教会主催の行事として定着し、つい最近の2013年12月1日(日)には第293回目の集いがバッハ・カンタータ140番とともに開かれました。本郷教会の〈讚美と祈りの夕べ Soli Deo Gloria〉については後ほど詳しくご報告したいと思っています。

10月20日(火)19:00 石橋メモリアルホール(BACH-ABEND バッハの夕べ)が開かれました。この時ほど慌てたことはありません。もともとギーベル先生がバッハ・カンタータ199番《わが心、血の海に漂う》を歌って下さる、とのことで進めていた企画だったので、チラシの輪転機が回り出す数分前「ユミコ！わたしはアグネ

ス。高いところから落ち、背中を打ってしまった。残念だが今年はどこへも行かれない。来年、健康になったら良いプログラムを早目に考えよう」との電話。コンサートを取り止めてアグネスを見舞いたい、と思いましたが、シュッツ合唱団のメンバーとムシカ・ポエティカのプレイヤーたちが、すぐに演奏出来る曲を次々に提示してくれ、あっという間に次のようなプログラムが組まれたのです。

《イエス、わが喜び》(BWV 227) 5声部のモテット

《トリオ・ソナタ ト長調》(BWV 1039)

《イエスはわたしの最初の言葉》(BWV 171) (カンタータ 171 番よりアリア)

《2台のチェンバロによるコンチェルト ハ長調》(BWV1061a)

《歌え、主に向かい新しき歌を》(BWV 225) 二重合唱 8声部のモテット

Vn: 小野萬里 Vdg: 福沢宏 Cem: 故・小島芳子 Cem: 武久源造

合唱: ハインリヒ・シュッツ合唱団 指揮/ Sop: 淡野弓子

ギーベル先生の不在は悔やまれましたが、自分たちの力で短期間にバッハのプログラムでコンサートを成功させることが出来た喜びは大きく、段々に我々の意気も上がってきました。

6月にシュッツの《イタリア風マドリガーレ》を歌い、シュッツ経由の“イタリア”にかつてないほどのショックを受けた私は、シュッツが「鋭い感覚の人」と評したモンテヴェルディのマドリガーレを手に入れます。7月には器楽奏者を交えた試演を行い、瞬く間に彼の天才に圧倒されました。皆の気持ちは一気にモンテヴェルディに向かって燃え上がり〈Claudio★クラウディオ〉の名を冠した新しいアンサンブルが発足します。今思うと怖いものしらずの極めて無謀な挑戦でした。

この頃、正確には1992年10月31日、実に359年4ヶ月と9日ぶりにガリレオの破門が解かれたというニュースに接しハッとしました。ガリレオ・ガリレイ (Galileo Galilei 1564-1642)、クラウディオ・モンテヴェルディ (Claudio Monteverdi 1567- 1643)、2人はほぼ同じ時を生きていたのです。そしてここまでの作曲家はみな「天動説」のもとに音楽を創り演奏していたのです。ガリレオは1583年振り子時計を思いついたとのことですが、それまでの時の計測が蝋燭、砂、水、太陽などを用いたものであったことも、興味深い事実です。同じ1分でも振り子が60回行き来するのと砂時計で計った1分とでは時の中身が異なりますが、モンテヴェルディは厳格に刻まれた時間と、言葉の情感によって伸びたり縮んだりする情動のテンポを自在に使い分けているのです。

ムシカ・ポエティカの新しいアンサンブル〈Claudio〉発足記念公演

12月11日(金)19:00 東京カテドラル聖マリア大聖堂

Claudio Monteverdi 《倫理的・宗教的な森 selva morale e spiritual》(1641) 全40曲中の10曲

I. 詩編110「わが主に賜わった主の御言葉」その1 [8声合唱・器楽2声・通奏低音]

II. ミサ [4声合唱 ア・カペラ]

III. 詩編112「いかに幸いなことか、主を畏れる人」その2 [5声合唱・通奏低音]

IV. めでたし、天の女王 [ソプラノ2重唱・通奏低音]

V. 詩編111「われ主に感謝せん」その3 フランス風 [ソプラノ独唱・器楽4声・通奏低音]

VI. おお盲いた人よ [7声合唱・器楽2声・通奏低音]

VII. わたしの嘆息を聞くあなた方 [5声合唱・器楽2声・通奏低音]

VIII. 人の生命は稲妻の如く [5声合唱・通奏低音]

IX. マニフィカト その2 [4声合唱 ア・カペラ]

X. 7声のグローリア [7声合唱・器楽2声・通奏低音]

指揮/ Sop: 淡野弓子 Sop: 石塚瑠美子 M. Sop: 羽鳥典子

Vn: 小野萬里 Rec: 守安功/ 淡野太郎 Vdg: 福沢宏 Lut: 中野哲也 Vne: 西澤誠治 Cem: 小島芳子

Org: 武久源造/ 大石すみ子/ 柳澤一枝

クラウディオの合唱メンバーはシュッツ合唱団、イースター・クワイヤ総出演という感じです。これほど多くの出演者も珍しいことですので、ここに全員の名前を記しておきます。

S I: 蘆野ゆり子、阿部昭子、阿部周子、金井知子、小役丸佐知子、阪本恭子、玉井千恵、故・毛利忍、柳澤一枝

S II: 今村ゆかり、岩崎美帆、大石すみ子、金井まゆみ、金子美緒、柴田圭子、中村康子、平久江由理、湊岑子、山田由紀子

A I: 赤羽根美穂子、秋山百合子、市瀬寿子、島崎伸子、田畑玲子、中江紗智子、根岸依子、本田純子、松本典子

A II: 石井賢、石井佳子、石塚瑠美子、上野宏子、串田委子、桑田倭文子、斉藤嫩子、定家励子、塩谷和子、

野間明子

T I/ II : 大森雄治、木田新一、駒井義明、笹井宏益、淡野太郎、辻康介、長山宏、細川裕介、依田卓  
B I/ II : 井岡幹博、石塚正、小宮富司雄、故・斉藤公治、阪本一郎、谷口正、富田英雄、春宮哲、渡辺功一  
ディストラーにモンテヴェルディといういさかエキセントリックな年が終わろうとするころ、本郷教会のクリスマス・コンサートでシュッツの《クリスマスの物語》を演奏するとの予告を見つけました。

12月20日(日) 19:00 本郷教会 クリスマス・コンサート「讃美と祈りの夕べ」  
聖書に聴く「星に導かれて」 本郷教会牧師 川崎嗣夫  
シュッツ《クリスマスの物語》

Vn : 小野萬里、小淵晶男 Org : 武久源造 ほか  
重唱/ 独唱/ 合唱 : シュッツ合唱団、クラウディオ

——本郷教会では毎年夏とクリスマスに教会コンサートを開くことになりました。との告知が添えられており、本郷教会が教会音楽の場としても徐々に成長して行く様子がかがえます。

1993年はシュッツ合唱団が誕生して25年目に当たる年でした。これを記念して5回のコンサートが計画されました。

ハインリヒ・シュッツ合唱団・創立25周年記念コンサート

- I. シュッツ全作品連続演奏 [8] シュッツ《ルカ受難曲》
- II. メンデルスゾーン《パウロ》
- III. シュッツ全作品連続演奏 [9] Sagittarius (シュッツ・ソロアンサンブル) 発足公演
- IV. 〈レクイエムの集い〉 モーツァルト《レクイエム》
- V. シュッツ全作品連続演奏 [10] シュッツのモテット&ブクステフーデのオルガン曲

この他〈淡野弓子 メゾ・ソプラノ リサイタル〉(2月)、〈Claudio〉第2回公演(7月)が催されています。以下、日付け順に思い出して見ましょう。

2月5日(金) 19:00 武蔵野市民文化会館 [ARTE] 小ホール

〈淡野弓子 メゾ・ソプラノ リサイタル〉 私にとっては初めてのリサイタルでした。  
(実は、今年2013年2月4日(月)、私は小林道夫氏のピアノとともに長い間の夢であったドイツ歌曲のリサイタルを開いたのですが、初回から丁度20年目だったということに今気付きました。)  
共演 : Lut : 中野哲也 Vdg : 福沢宏 P : ウォン・ウィン・ツァン P/ Org : 武久源造  
《マリアの頌歌集》より「バラのなかのバラ」/ ラングレ《ミサ》/ モンテヴェルディ《アリアンナの嘆き》/ クルト・ワイル《三文オペラ》より Songs/ 武久源造、ウォン・ウィン・ツァンによる創作歌曲《薔薇は生きてる》。

少女時代に愛読した山川弥千枝『薔薇は生きてる』を書店で見付け、懐かしさのあまり買い求め、ウォンさん、武久さんに作曲をお願いして幾つかの詩と短歌を作曲して戴きました。ここに弥千枝の歌一首をご紹介します、詳しくは機会を改めたいと思います。

美しいばらさわってみる。つやつやとつめたかった。ばらは生きてる。

3月24日(水) 19:00 東京カテドラル聖マリア大聖堂

I. シュッツ全作品連続演奏 [8] ☆シュッツ合唱団・創立25周年記念コンサート [I]

ハインリヒ・シュッツ《カンツィオーネス・サクレ 1625》より「おお善き、優しき、慈しみ深きイエスよ」(SWV53-54)  
メルヒオール・フランク《雅歌》

ハインリヒ・シュッツ《ルカ受難曲》

福音史家(T) : 佐々木正利 イエス(B) : 宮原昭吾 ペテロ(T) : 依田卓

ピラト(Br) : 辻康介 下女(S) : 淡野桃子 下僕 I(T) : 木田新一 下僕 II(B) : Brian Watson

強盗 I(A) : 細川裕介 強盗 II(T) : 淡野太郎 百人隊長(B) : 春宮哲

合唱 : ハインリヒ・シュッツ合唱団 指揮 : 淡野弓子

プログラムにはシュッツの残した三つの受難曲——マタイ、ヨハネ、ルカに用いられた受難曲の伝統的な形式「コ

ラール・パシオン」について解説されています。すなわち、

\* コラールとはグレゴリオ聖歌風の朗唱を指し、この朗唱によって物語が進められる。

\* 朗唱は福音史家、イエス、ピラトなど1人の人物が語る時に用いられ、弟子たち、ユダヤ人たちといった複数の人々が語る台詞は合唱で歌われる。

\* テキストは聖書の受難記事(ルカによる福音書第22,23章)そのままである。

といったところですが、「受難曲」と聞けばバッハのマタイやヨハネを思い浮かべる方々がほとんどですので、20年たった今でもこのような説明は必要です。またシュッツとバッハを比較する際、両者の受難曲を並べて考察することは非常に有効であるばかりでなく、興味の尽きない話題を提供することでしょう。

7月3日(土)19:00 カザルス・ホール (Claudio 第2回公演)

Claudio Monteverdi 《愛と戦いのマドリガル Madrigali guerrieri et amorosi》

- I. 可愛い小さな小鳥が [7声合唱・器楽2声・通奏低音]
- II. さあ、愛らしい羊飼いの少女たち [3声合唱 ア・カペラ]
- III. いかないでおくれ、強情っぱりさん [3声合唱・ア・カペラ]
- IV. いとも甘き夜鶯 [ソプラノ独唱・4声アンサンブル・通奏低音]
- V. いまや天も地も/ かくて唯一つの清き生命の泉のみが [6声合唱・器楽2声・通奏低音]
- VI. わたしは燃える [8声合唱・器楽2声・通奏低音]
- VII. 心を武装して [テノール2重唱・通奏低音]
- VIII. わたしは燃え [ソプラノ2重唱・通奏低音]
- IX. 他の者は歌え、軍神マルテを [6声合唱・器楽2声・通奏低音]  
2つの美しい眼が [バス独唱・6声アンサンブル/ 合唱・器楽2声・通奏低音]
- X. シンフォニア [器楽3声]  
他の者は歌え、愛の歌を [バス独唱・3声アンサンブル/ 合唱・器楽2声・通奏低音]

指揮/Sop: 淡野弓子 M. Sop: 羽鳥典子 B: 宮原昭吾

Rec: 守安功、淡野太郎 Vn: 小野萬里、大田也寸子

Vdg: 平尾雅子、D. ハッチャー、石川かおり、福沢宏 Vne: 西澤誠治 Cem: 故・小島芳子

合唱メンバーにはすでに移動が見られ、発足記念のメンバーから14名が欠場、新人が7名加わり総勢47名となりました。

モンテヴェルディの作品集第8巻として1638年に出版された《戦いと愛のマドリガル》は通奏低音付きの二重唱や三重唱、5声、6声のマドリガル、器楽の助奏の付いたコンチェルト風のもの、踊りや芝居を伴った声楽曲などが〈戦い・・・〉に20曲、「愛・・・」に18曲収められています。

ところでこの《戦いと愛のマドリガル》とは一体なにを意味しているのでしょうか。モンテヴェルディはこの曲集の序文で「・・・私たちの心の状態は主として怒り、平静、慎みの3つが考えられる。音楽作品の中に平静と慎みはすでに表現されているが、怒り、興奮を現したものはまだ見たことがない。プラトンは彼の著書『Republica 国家』の中で『戦さにあつて勇敢に戦う人の調べを残すように』と言っているのがそれである。(後略)」と語り、「・・・私たちの心を深く動かすものは相反するもの・・・」とも述べ、「戦い」と「愛」を対置するばかりでなく、「戦い」のなかの積極性と防御性、「愛」のなかにある勇気と節度を音楽化したのです。

彼の音楽を演奏していると、言葉の振動が聴く者、歌う者の身体を直撃するので、恐ろしいまでの臨場感が漂い、感情がどんどん生々しいものに変わって行きます。人々の脳を目覚めさせ、興奮に導き、麻薬のような力を発揮するので、練習中何度も「こんな音楽を公開の席で演奏してよいのだろうか？」と自問したものです。

前年は来日不能となったギーベル先生でしたが、「今大きな作品で歌っておきたいのは《パウロ》」と漏らされたひとと言がきっかけとなりメンデルスゾーンの大作《パウロ》の上演が決まりました。

9月10日(金) 18:30 東京カテドラル聖マリア大聖堂

II. メンデルスゾーン 《パウロ》 ☆シュッツ合唱団・創立25周年記念コンサート[II]

パウロ(Br): 故・宮原昭吾 Sop.: アグネス・ギーベル Alt: 佐々木まり子

Tenor: 佐々木正利、細川裕介 Br: 淡野太郎

合唱: ハイブリッド・シュッツ合唱団 & Claudio

オーケストラ: シンフォニア・ムシカ・ポエティカ 指揮: 淡野弓子

Vn I : 高田あずみ(コンサートマスター)、竹島祐子、高田はるみ、大田也寸子  
Vn II : 小野萬里、高岡真樹、大谷美佐子、三品祥子  
Va : 李善銘、森田芳子 Vc : 諸岡範澄、中沢(現・西澤)央子 KB: 西澤誠治、櫻井茂  
Fl : 故・田中潤一、菊池香苗 Ob : 川村正明、庄司知史  
Cl : 赤坂達三、万行千秋 Fg : 大沢昌生、井上俊次 C.Fg : 越康寿 Tuba : 荻野晋  
Hrn : 磯部保彦、田場英子、岡村陽、望月正樹 Trp : 津堅直弘、杉本正毅  
Trb : 和田美亀雄、小倉史生、松原正幸 Timp : 近藤健一(現・高頭) Org : 小林英之

メンデルスゾーンのモテットは幾つか知ってはいたものの、このような大掛かりな作品に取り組むのは初めてのことでした。しかし枠組みや内容はバッハ、ヘンデルの音楽の延長線上にあり、難なく身体に溶け込むメンデルスゾーンの旋律やハーモニーは、モンテヴェルディ、シュッツ、バッハ、ヘンデル、はたまたディストラートといった強烈な音をくぐり抜けて来た我々にとって、それはまさにオアシスでした。

メンデルスゾーンは1833年デュッセルドルフ市の音楽監督となり、劇場での公演に加えて教会音楽の演奏にも力を注ぎました。ここで彼が取り上げたのはパレストリーナ、ラッソに始まり、ヘンデルの《エジプトのイスラエル人》、《メサイヤ》、《アレクサンダーの饗宴》などなど、バッハ《マタイ受難曲》の蘇演のみならずヘンデルの復興にも寄与しています。このような地道な努力を下地とし、1836年《パウロ》が初演されたのでした。

このような事実を知って、改めて《パウロ》を良く観察すると、それはバッハの受難曲とヘンデルのオラトリオの統合であるというような簡単なものではなく、ルネサンス期の作曲技法からもそのエッセンスを学び取っているように思われました。また、巧みな和声進行に驚かされると同時に、それを表現する楽器の組み合わせ方から彼の極めて優れた音色感覚を知らされ、一般に語られるメンデルスゾーン像とは全く異なる彼の姿、心の深みに息づく彼の信仰を垣間見たのです。

この日の演奏は、アグネス・ギーベルを始め、故・宮原昭吾、佐々木正利、佐々木まり子といった実力派の名演、オーケストラにも各セクションに代表的な名手が力を貸して下さり、成功に導かれました。ライブ録音がCDからリリースされ、日本で初めての《パウロ》のCDとして、いまだに販売が続いているのは大きな喜びのひとつです。

シュッツ全作品連続演奏もいよいよソロアンサンブルの演奏を考えねばならぬ時に入りました。《シンフォニエ・サクレ》などの華麗な作品を精鋭メンバーでとの考えから、「サギタリウス」(シュッツのラテン名)という名のソロアンサンブルを組織し、第1回の演奏会が開催されました。

10月5日(火) 19:00 カザルス・ホール

### III. シュッツ全作品連続演奏 [9]

Sagittarius (シュッツ・ソロアンサンブル) 発足公演 ☆シュッツ合唱団・創立25周年記念コンサート [III]

Sop : 徳永ふさ子、酒井美津子 M. Sop/ 指揮 : 淡野弓子 T : 佐々木正利 B : 宮原昭吾

Rec : 守安功 Trb : 萩谷克己、利根川勝、巻島俊明、福神浩貢

Vn : 小野萬里、斎藤瑠奈 Vdg : 福沢宏 Vne : 西澤誠治 Chit : 竹内太郎 Cem : 故・小島芳子

Org/P : 武久源造

- I. 善きイエスよ (SWV 313)
- II. 重荷を負う者、われに来たれ (SWV 261)
- III. 主にあつてわたしの心は喜び (SWV 258)
- IV. 我が子、アプサロン (SWV 269)
- V. 音楽による葬送 Musikalische Exequien (SWV279-281)
- VI. おお甘く、親しく、寛大なるイエスよ (SWV 285)
- VII. 主にあつて喜びをなせ (SWV 311)
- VIII. 主よ、心からあなたをお慕いします (SWV 387)
- IX. どのような時にも私は主をたたえ (SWV 306)
- X. コラール : いざや、ともに

最後のコラールは、一つ前にギーベル先生が歌われたシュッツの „Ich will den Herren loben alle Zeit” の「どのような時にもわたしは・・・」に続いて「わたしたちも・・・」との願いを込めて会場の皆様とともに賛美歌「いざやともに」を日本語で歌ったのでした。これはギーベル先生からの提案でした。

恒例の〈レクイエムの集い〉です。

11月4日(木) 19:00 石橋メモリアルホール 〈レクイエムの集い〉

IV. モーツァルト《レクイエム》☆シュッツ合唱団・創立25周年記念コンサート [IV]

モーツァルト《幻想曲二短調》(K. 397)

《ピアノ四重奏曲ト短調》(K. 478)

F. Piano: 故・小島芳子 Vn: 小野萬里 Va: 森田芳子 Vc: 中沢(現・西澤)央子

モーツァルト《レクイエム》(K. 626、1992年 Duncan DRUCE 版日本初演)

Sop: 故・朝倉蒼生 Alt: 羽鳥典子 Tenor: 佐々木正利 Br: 鎌田直純

合唱: ハインリヒ・シュッツ合唱団

オーケストラ: シンフォニア・ムシカ・ポエティカ(ピリオド楽器)

Vn I: 小野萬里(コンサートマスター)、高田はるみ、大田也寸子

Vn II: 竹島祐子、永井寿子、三品祥子

Va: 李善銘、渡部安見子 Vc: 畑野誠司、中沢(現・西澤)央子 Vne: 櫻井茂

B. Hr: 坂本徹、上村千春 Fg: 堂阪清高、川村正明

Trba: 津堅直弘、栃本浩規 Trb: 萩谷克己、利根川勝、福神浩貢

Timp: 近藤健一(現・高頭) Org: 河野和雄 指揮: 淡野弓子

モーツァルトの《レクイエム》、未完に終わったこの作品を巡って、今も多く作曲家や研究者が努力を重ねていますが、この日は1992年、イギリスのダンカン・ドゥルースによって校訂、完全化された新版でした。ドゥルース氏はイギリスのシュッツ・コンソートのヴァイオリン奏者で、これまでのジュースマイヤー版に敬意を表したうえで取りかかっていると表明しています。モーツァルトが8小節書いて中断し、9小節目からの展開は誰にも分からない(Lacrimosa)は、ジュースマイヤーがどういうわけか9小節目から最初の詩節‘Lacrimosa〜〜’を繰り返したためにどことなく座りのわるくなった曲を、ドゥルースは決然と次の詩節‘Huic ergo’に突入しています。この部分の2小節間のメロディはアイブラーのスケッチにある通りのものですが、これで(Lacrimosa)の言葉と音楽の関係がはっきりしたわけです。私もモーツァルトがこのレクイエムに残した言葉と音楽の関係を辿ってみた結果、彼が7-8小節の「judicandus homo reus」の後、筆を投げてしまった理由が分かったのですが、これは私個人の推論に過ぎませんのでここでは触れません。またドゥルースは、(Lacrimosa)の最後の部分でジュースマイヤーが2小節しか残さなかった「Amen」の部分をもとに127小節に及ぶフーガ(因みにモンダー版の「Amen」フーガは79小節)を書いています。この版での演奏はすでにノーリントン指揮、ロンドン・シュッツ・クワイヤによってCDが出され評判となっていました。日本ではこのコンサートが初演ということになり、ドゥルース氏から次のようなメッセージを戴きました。

「東京のH.シュッツ合唱団が私の版で演奏なさると聞き喜んでます。皆様がこの版で歌い奏することに価値を見いだして下さることを願い、公演の成功を願って心からの挨拶を送ります。」

25周年記念演奏会も最終回を迎え、25年を振り返って印象深かったコンサートを思い出しながら、私たちが1985年の〈国際ハインリヒ・シュッツ祭〉においてベルリンのシャウシュピールハウス、ライプツィヒのゲヴァントハウスで取り上げた作品を演奏しました。

11月14日(日) 15:30 石橋メモリアルホール シュッツ全作品連続演奏 [10]

V. シュッツのモテット&ブクステフーデのオルガン曲 ☆シュッツ合唱団・創立25周年記念コンサート [V]

・シュッツ:《宗教合唱曲集1648》(1648)より 神の救いの御恵みが顕われた(SWV 371)/ 自分のみで生きる者はない(SWV 374)/ 言葉は肉体となって(SWV 385)

・ブクステフーデ:《プレルディウム ト短調》

・シュッツ:私はまことのぶどうの木(SWV 389)/ 多くの人が西から東から来て(SWV 375)/ あらかじめ雑草を集め(SWV 376)

・ブクステフーデ:《コラルファンタジー「げに麗しき暁の星」》

・シュッツ:主よ あなたに寄り頼みます(SWV 377)/ 涙とともに種蒔く者は(SWV 378)/ 天は神の栄光を語り(SWV 386)

・ブクステフーデ:《コラルファンタジー「テ デウム ラウダムス」》

・シュッツ:神はその独り子を賜うほどに(SWV 380)/ おお愛する主なる神よ(SWV 381)/ それはまことのまこと(SWV 388)

オルガン: 武久源造 合唱: ハインリヒ・シュッツ合唱団 指揮: 淡野弓子

このプログラムは、シュッツが言葉を音楽の表現に移し替え、声によって聴き手を説得していった技法と、ブクステフーデが幻想様式を用いて、劇場的なパフォーマンスをオルガンによって自由自在に演じる技とが変わるがわる登場するという構成でした。さらにブクステフーデのプレルディウムやテ・デウムでは冒頭の凝縮された数秒と、その後の長く引き伸ばされ穏やかに語りかける数分が同じ重さを持って迫って来ます。この時間の密度という不思議な現象を始め、音楽にまつわる様々な時間の姿は、演奏に携わる者にとって興味の尽きないテーマであると同時に、終わりのない課題であることを知らされています。

12月19日(日) 19:00 開演の本郷教会クリスマス・コンサートでシュッツ《12の宗教歌》とモンテヴェルディ《倫理的・宗教的な森》よりモテットを歌い、狂躁怒濤の1993年もなんとか幕を閉じました。(続く)

## 会員の動向(演奏会や企画等)

- 1) 荒川恒子(お問い合わせ [eterna@nifty.com](mailto:eterna@nifty.com) Tel/Fax 045-421-0502)
  - ・2013年12月22日(日) 15:30- 於: 山梨県立図書館多目的ホール  
第83回「ムジカ エテルナ 甲府」定期演奏会
  - ・2014年5月2日-6日 古楽フェスティバル〈山梨〉(含む第27回国際古楽コンクール〈山梨〉)  
コンクール(鍵盤楽器部門: チェンバロとフォルテピアノ、アンサンブル部門)、審査委員および入賞者による  
コンサート、鍵盤楽器や楽譜、CD等の展示会、G.ウィルソン氏チェンバロ・マスターコース等  
於: 甲府市街、東京 詳細は <http://homepage2.nifty.com/eterna/>
  - ・2014年7月3日(木) 19:00 東京: 近江楽堂 7月6日(日) 15:30 甲府: 山梨県立図書館多目的ホール  
第84回「ムジカ エテルナ 甲府」定期演奏会
- 2) 佐藤 望(お問い合わせ 慶応義塾大学日吉キャンパス音楽学研究室 <http://musicology.hc.keio.oc.jp/>)
  - ・2013年12月21, 22日、2014年1月4, 5日 17:00 於: 藤原 洋記念ホール  
モーツァルトの《コジ・ファン・トゥッテ》
  - ・2014年1月15日(水) 18:30 於: 藤原 洋記念ホール  
ハイドンのオラトリオ《四季》より〈春〉他
  - ・2014年1月19日(日) 14:00 於: 藤原 洋記念ホール  
ブクステフーデのカンタータ他
- 3) 淡野弓子(お問い合わせ ムシカ・ポエティカ <http://www.musicapoetica.jp> Tel/Fax 03-3998-8162)  
ムシカ・ポエティカ発足30周年記念コンサートシリーズ
  - ・2014年4月2日(水) 18:45 於: 大和田さくらホール  
〈受難楽の夕べ〉 J.S. バッハ 《マタイ受難曲》  
合唱: ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京&メンデルスゾーン・コア・国分寺チェンバークワイア  
指揮: 淡野弓子
  - ・2014年5月16日(金) 19:00 於: 日暮里サニーホール  
淡野太郎バリトン・リサイタル 伴奏: 小林道夫  
L.v. ベートーヴェン《遙かなる恋人へ》 R. シューマン《詩人の恋》
  - ・2014年7月4日(金) 19:00 於: 三鷹市芸術文化センター「風のホール」  
「17世紀の華」 シュッツ・シャイン・シャイト名曲選 ハインリヒ・シュッツ合唱団・東京 指揮: 淡野太郎
- 4) 橋本周子(お問い合わせ <http://www.st-gregorio.or.jp/>)
  - ・CD グレゴリオ聖歌集「至高のハーモニー 心に深く静かにしみわたる、二つのミサ」[クー・レコード COO 033]  
指揮: G. ヨッピヒ 合唱: カペラ・グレゴリアーナ・ファヴォリート・トウキョウ がレコード芸術準特選盤
  - ・クリスマス、新年のミサ、お祈り  
2013年12月24, 25, 28日、2014年元旦 於: 聖グレゴリオの家
  - ・2014年4月28日(月)、29日(火) 教会音楽講習会 於: 聖グレゴリオの家
- 5) 米沢(鏑木)陽子(お問い合わせ <http://www.t-junshin.ac.jp> 東京純心女子大学こども文化学科)
  - ・2014年度には、学内で3回のオルガン・レクチャー・コンサートを開催予定

6月には聖霊降臨祭にちなんで、9月にはバッハのライプツィヒ・コラールに関してである。

### ハインリヒ・シュッツ・フェスト 2014、コペンハーゲンへのお誘い

2. - 5. 10. 2014, コペンハーゲン

来年のフェストは「デンマークとザクセン-M. ルターと H. シュッツの間の音楽文化」というテーマを掲げ、コペンハーゲンで開催されることになりました。すでに 5 本のコンサート (Ensemble Musica Ficta、Holmens Barockensemble、Chor und Barockensemble der Trinitatis Kirke、Capella Hafniensis、Capella Sagittariana Dresden と Ars Nova Copenhagen & Concerto Copenhagen)、コペンハーゲン大学神学部と提携した 5 本の講演、小旅行 (Frederiksborg Slot、Helsingør、Kronborg) 等が計画されています。御一緒にこの北の都を訪れることができますよう、御予定くださいませ。

### ドレスデン宮殿礼拝堂に設置されるフリッチェ・オルガン建造への寄付のお願い

シュッツのドレスデン宮廷楽長時代には、宮殿の中に礼拝堂がありました。そこで彼が歌手を率いて指揮をしている絵姿が残され、しばしば音楽書に引用、挿入されています。この礼拝堂は 1551-1553 年に建築され、その後細かい改築をしつつ 1737 年まで宮廷のプロテスタント礼拝堂として、使用されていたのです。特に重要なのは、1612 年にゴットフリード・フリッチェにより製作された、見事なオルガンが設置されたことです。このオルガンのテストは M. プレトーリウスと H. シュッツにより行われました。

さて第二次世界大戦により壊滅的な状況になったドレスデンの街は、ほぼ 18 世紀バロック様式で再建されました。しかし宮殿の再建はまだまだ終わっていません。礼拝堂は 17 世紀初頭の姿で再建し、そこにフリッチェ・オルガンを置くことが、かなっていないからです。なお 2013 年 12 月には礼拝堂は音楽をもって祝われ、一般人にも紹介されました。後はオルガンの設置です。フリッチェ・オルガンは残っていません。しかしこの素晴らしいオルガンに関しては、その仕様、また後のオルガンに、その一部が再利用されたりして、往年の姿をある程度思い描くことができます。2017 年の宗教改革記念年までには、再建すべく寄付をお願いしています。これが完成するとルネサンスからバロック初期のオルガン・ソロおよび、アンサンブル作品の演奏を、今までよりも適切な音響で楽しむことができるはずです。<http://www.heinrich-schuetz.eu> で、そのことが紹介されています。

お志しのお有りの方は、以下に御寄付をお願いいたします。

Spendenkonto: Heinrich Schütz in Dresden e.V.

Ostsächsische Sparkasse Dresden

Konto 320 003 1688/ BLZ 850 503 00

IBAN DE09 8505 0300 3200 031688

BIC OSDDDE81XXX